



名づけの前

緊張とは、恐怖ではなく、
存在と評価の距離が生む歪みである。

人は、ただ在るだけでは揺れない。
何か起きたからでもない。

関係が、静かに切り替わる。
その瞬間だけ、空気がわずかにずれる。

緊張は、弱さではない。

失敗への恐れでも、経験の不足でもない。

そう名づけた瞬間、
それはすでに別のものになっている。

世界との関係が、変わる。

在るものが、測られはじめる。

内側には、まだ形にならないものがある。

言葉の手前で滞っている思考、
輪郭を持たないまま動いている感覚。

そこに、外側の基準だけが先に触れる。

完成、正解、役割。

それらは、
まだどこにも辿り着いていないものに、
先に形を与える。

差し出されたのは、完成ではない。
だが、完成の位置に置かれる。

まだ息をしているものが、
固定される。

緊張は、そのときにだけ生じる。

未完のものが、
完成として扱われたときに残る、
わずかなずれ。

それは拒絶ではない。

むしろ、
内側がまだ続いているという反応に近い。

緊張がほどけると、
人はうまくやろうとしなくなる。

評価の外に出るのではなく、
評価と同じ場所にいながら、
測られない位置に戻る。

何も足されず、
何も決められていない状態のまま、
そのまま置かれる。



名前になる前のものが、
一瞬だけ、震えている。



Edition — 存在の芯
別景：名づけの前

著者：美学思想家 古川玲奈
発行：Raffiné
2026